



かわせみ通信

自然観察園情報

※野外施設の情報は、ホームページで詳しく見られます↓

県立自然環境保全センター 生き物 検索



保全センターの野外施設には、身近な自然を観察する場の自然観察園(昭和57年オープン)と、樹木一つ一つをじっくり観察する場の樹木観察園とがあります。樹木観察園は約50年前(旧林業試験場時代)に整備されました。

野外施設では、それぞれの季節に、生き物同士の巧みなつながりや、植物や虫たちの興味深い生命活動など、大自然の不思議な現象にいろいろふれることができます。

このかわせみ通信では、野外施設でみられる自然のいとなみを「季節の様子」、「生き物記録」、「最近の話題」、「こんな手入れをします・しました」などの項目で情報を掲載していきます。

<季節の様子・夏>

7月、8月と夏の盛りを迎える野外施設では、うっそうとした林は鳥の声よりセミの声がにぎやかで(セミの声の聞こえる時期については第2号をご覧ください)、谷戸にはトンボが飛び交います。トンボは種類によって生息環境がちがうため、どんなところにいるのか周りの環境に注目してみてください。9月になるとまだまだ暑さが続く中に秋の気配を感じられるようになります。

タイアザミやヤマホトトギスなど秋の花が咲き、春夏に花が咲いた植物は実りの季節となります。

野外施設で見られるトンボの例

明るい池、沼	クロイトトンボ、ギンヤンマ、ショウジョウトンボ、ナツアカネなど
うす暗い池、沼	オオアオイトトンボ、クロスジギンヤンマ、コシアキトンボなど
湿地	シオヤトンボ、シオカラトンボ、サラサヤンマなど
小川、用水路	カワトンボ、ハグロトンボ、ヤマサナエ、オニヤンマなど



左上：ショウジョウトンボ、右上：コシアキトンボ
左下：シオカラトンボ(交尾中)、右下：ハグロトンボ

<4月～6月の生き物記録>

●春植物の出現

今年も3月中旬から4月にかけてNエリアではたくさんの春植物が咲きました。(Nエリアについては、第1号参照。)ここで見られるキクザキイチゲ、ニリンソウ、イチリンソウ、ヤマブキソウは、宮ヶ瀬や厚木市古沢から移植したものです。(神奈川県立自然保護センター報告No.6参照。)かつてはNエリアのようなケヤキ林がたくさん見られた地域ですが、現在はダムや水抜き工事によって姿を消したため、保全センターで見られる「春のお花畑」は貴重な景色と言えます。



イチリンソウとニリンソウ

大雨によって流されるなど数が減少したこともありますが、この2年ほどは生育範囲を広げてきています。落葉樹林の生長が進み春植物たちに適した環境になってきたことや、周辺の常緑樹と林床のササを刈って日の光が当たるようになったことなどが要因と考えられます。同じ場所であっても、人の利用や管理の仕方によって現れる生き物たちは変化します。

●ヒキガエル上陸

しとしと雨が降った5月17日、研究棟前の人工池でアズマヒキガエルの上陸が観察されました。ヒキガエルは5月中旬頃のある雨の日に一斉に池から移動を始めます。たった1日なので気が付かない間に終わっていることもあります。子ガエルはとても小さくて全長は5mm程度。これから林の中で小さな虫などを食べて立派なヒキガエルへと成長していき、春の産卵時期にまた池に戻ってきます。1匹の親ガエルが産む卵の数は1500～8000個ですが、上陸後、林で1年間生き延びられるのはほんのわずかといわれています。頑張れ！



上陸したヒキガエルたち（写真は2011年撮影）

●夏鳥の記録

もっと早くに初確認した方もいるかもしれませんが、自然保護課職員の記録では、4/13 オオルリ♂（視認）、4/22 キビタキ（さえずり）、5/19 ホトトギス（さえずり）、6/11 サンコウチョウ（さえずり）を確認しました。特にキビタキは5月、6月と盛んに鳴いていて、「ピッピリリ、ピッピリリ…」と鈴の音のような甲高いさえずりが聞こえていました。園内で営巣しているのか、オスとメスがエサを運ぶ姿も確認されました。

<最近の話題> —サルの群れ—

毎年5月から6月頃になるとニホンザルの群れが園内のクワの実を食べにきます。しかし今年は人を恐れる様子がなく、職員に向かってくる個体もいて、来館者の方へ注意喚起を行いました。センターの周辺では2つの群れが活動していて、農作物の被害はもちろん、過去には威嚇され、引っかかれたり噛みつかれたりする被害もあったようです。神奈川県では「ニホンザル管理事業」として、各市町村による花火などを用いた追い払いや電気柵の設置、個体数調整を行っていますが、なかなか被害は減っていません。（ホームページでは「第二種特定鳥獣管理計画（増えすぎた野生動物を適正に管理しようとするもの）」が見られます。）

もともとサルは森の中で季節に応じて若葉や芽、木の根、果実、昆虫などのエサを探して移動する生活をしていました。その年の気候、エサの状況に合わせて個体数も変化させることで群れを維持してきたのですが、餌付けが行われたり畑や雑木林の管理が不十分になったりしたことでだんだんと人里にも活動範囲を広げ、おいしいものが楽に手に入ることを覚えてしまったと考えられます。エサが豊富だと数が増えて、ますます森の中だけでは賄いきれなくなり、人の生活エリアでの被害を拡大させ、生態系のバランスにも影響を及ぼすようになってしまいます。サルだけに限らず、変わってしまった野生動物と人の生活を戻すのは大変で、とても難しい課題です。



観察路を歩くサル（写真は2014年撮影）

ミニ観察会（申込不要・参加費無料・雨天決行、当日午後1時に本館前集合）

ボランティアの解説員とともに野外施設の生き物を観察します。時間は約2時間です。

8月：7(日)・11(木・祝)・14(日)・21(日)・28(日)

9月：4(日)・11(日)・18(日)・19(月・祝)・22(木・祝)・25(日)

10月：2(日)・9(日)・10(月)・16(日)・23(日)・30(日)



傷病鳥獣救護の情報

※救護原因の詳細やその他の情報は、ホームページ↓

神奈川県 自然保護課 野生動物救護

検索



自然環境保全センター（旧自然保護センター）の傷病鳥獣の救護業務は、主に人間の活動が原因で傷ついて保護された県内の野生動物（鳥類と哺乳類の一部）を必要に応じて治療やリハビリを行い、野生に戻す業務を中心に昭和53年から行っています。

この「かわせみ通信」では、県民の皆様により持ち込まれた救護動物の「救護原因」や「リハビリ状況」などの情報を掲載していきます。

<平成28年4月～6月の受け入れ実績報告>

受付件数の多かった上位種

1位	スズメ	55件
2位	ムクドリ	39件
3位	ツバメ	33件
4位	シジュウカラ	18件
5位	カルガモ	12件

人間が関係する主な救護原因

鳥類		哺乳類	
営巣木の伐採など	40件	交通事故	3件
ネコなどに襲われる	28件	疥癬症(かいせんしょう)	1件
ガラス窓などへの衝突	25件	震にかかる	1件
釣り糸や防鳥ネットに絡む	3件	ネコなどに襲われる	1件
ペンキや粘着剤に絡む	3件	衝突	1件

<生き物のつながりーツバメの巣で起きていることー>

春から夏にかけて当センターには多くのヒナが持ち込まれます。その中でも年間で最も多く救護され、私達の身近な野鳥であるツバメについてご紹介します。

●ツバメってどんな鳥？



図1 巣材の泥をくわえているツバメ

スズメ目ツバメ科の仲間でフィリピンやインドネシアなどの東南アジアから繁殖（子育て）をするために、夏鳥として、日本（種子島以北）に飛来します。（図1）ツバメは、空中を飛ぶ羽アリやハチ、カゲロウ、トンボなどの昆虫を飛びながら捕食し、水も飛びながら飲むことができます。

越冬地より多くの虫が発生するこの時期の日本は、彼らにとって子育てをする貴重な繁殖地といえます。

彼らは日本でいったいどんな日々を過ごしているのでしょうか。

●まずは、中古物件を探しています！？



図2 巣の中でエサを待つヒナたち

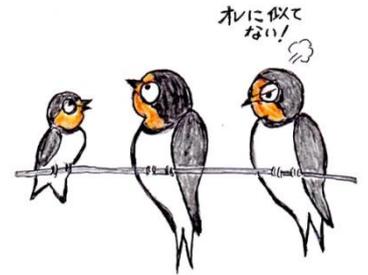
繁殖期は4月から8月で、その間に1回から3回程度子育てをします。ツバメの巣は、主に泥と枯れ草などで出来ていて、ヒトが出入りしている建物の壁などに造ります。（図2）それは、ヒトの近くにいることで外敵が近づきにくいからと言われていました。ヒトも害虫を捕ってくれる益鳥として、また、フンは作物の肥料として利用できることから、巣のある家には幸運が訪れるとされて昔からヒトとツバメは良い関係を築いてきました。しかし現在は、「鳴き声がうるさい」や「フンが落ちてきて困る」などヒトの意識の変化と子育てに必要な水辺と緑地がある環境が少なくなったことで、ツバメの数が減少していると言われていました。（図4）

この厳しい環境下ですが、昨年使った古巣を補修して使用するなど、限られた期間の中でもより多くの子孫を残せるように工夫しているようです。ツバメにとっては、運良く古い巣が残っていれば、いちから巣造りをする体力を温存できて、1日300回以上とも言われるヒナのエサ探しに集中することができるのです。

1回の子育てに要する期間は、約1か月間です。1日1卵を産み、約20日後に巣立ち、1～2週間は巣の近くで親鳥と共に過ごしエサの捕り方や飛び方などを学びます。(図5)たとえ、約4羽のヒナを大切に育てても翌年の繁殖に戻って来られる親鳥は、半分以下で若鳥はもっと確率が低くなります。命がけで旅をするツバメ達。できれば巣を壊さずに見守っていただけると嬉しいです。

●浮気？本気？仮面夫婦の実態はいかに・・・？

一夫一妻と言われているツバメ。電線に2羽が並んでいる姿は、見ている微笑ましいものです。しかし巣の中には、つがい以外の遺伝子をもったヒナがいる場合があることが調査研究によってわかってきました。その理由として、オスはより多くの子孫を残すためにつがい以外のメスとも交尾をし、メスもまた、より丈夫で優れた遺伝子をもったオスとの子孫を残すため、つがい以外のオスとも交尾をし、卵を産み育てます。



私達には浮気と思われるこの行動ですが、厳しい自然界で自分の子孫を残すためには必要なことなのかもしれません。

●ツバメが育っていく中で、次のような危機が訪れます・・・

スズメ	ツバメのヒナを落として巣を横取りします。そして、スズメ仕様の巣に改修してから子育てをします。
カラス	定期的にヒナの成長具合を確認しにやってきて、大きくなったら食べるため連れ去ります。
ヘビ	壁を登れるので、巣内の卵やヒナを食べるために連れ去ります。
ネコ	親鳥もヒナも食べるために連れ去ります。
ヒト	巣立ちしたばかりのうまく飛べないヒナを、知らずに巣から落ちたと思った心優しい人に保護されます(=連れ去り)
ツバメ	ヒナのオス親が死亡や行方不明になると、メスは新しいオスとつがいになることがあります。すると、新しいオスにとってヒナは血の繋がりががないので巣から落とし、自分の子孫を残そうとする場合があります。またヒナは、1回につき1羽しかエサがもらえません。エサをもらうためには、他の兄弟より1秒でも早く大きく口を開けてお腹がすいていることをアピールしなくてはいけないのです。兄弟でも遠慮はしません！

その他にも危険がいっぱいあります。彼らは、この危機を乗り越えて生き延びなくてはなりません。ひとつの命を守りたいと思う気持ちは、とても大切です。そして、危機を回避できなかったツバメをかわいそうに思うかもしれません。しかし、天敵にとっても生きていくためには必要なことなのです。そしてツバメもまた、多くの昆虫の命に支えられ、その昆虫も植物の命に支えられています。こうして、生き物たちは多くの命をつなぎながら生きているのです。この食べる食べられるという微妙なバランスで保たれている自然界なので、そっと見守ることも大切なのです。

●私たちにできること・・・



図3 代用の巣

ヒナが巣から落ちていたら、戻せるなら巣に戻し、戻せない時は代わりの巣を用意しましょう。



図4 ヨシ原

天敵から身を守るためにヨシ原などに集団でねぐらをつくります。こうした環境を守ることも大切です。



図5 巣立ちしたヒナに親鳥がエサを与えているところ

巣立ちした後も飛ぶ練習やエサを捕る練習をしています。親鳥も見守っていますので、遠くから見守りましょう。

【参考資料：日本野鳥の会、2016年7月号「野鳥」、北村 亘氏、2015、「ツバメの謎」
図1、図5の写真とイラスト提供：坂本 堅五氏】